

第17回ワーカーズ・コレクティブ 全国大会 inTOKYO

主人公は自分 ～協同で働き、ともに生きる～

17回目を迎えたワーカーズ・コレクティブ全国大会が、2025年11月29・30日に東京で開催され、各地から実参加・オンライン参加合わせて1,108名が集まりました。全体会と懇親会、5つのテーマの分科会、自主企画、現地見学ツアー4カ所の内容で、それぞれの場面での交流も深まりました。自治体職員や議員などの参加もあり、労働者協同組合への関心の高さも感じました。



全体会 第2部 パネルディスカッション

全体会 (1日目)

イントロダクションとして、駒沢大学経済学部の松本典子教授（下写真）から労働者協同組合（以下、労協）の価値と可能性について話を聞きました。

キャンプ場経営や子ども・若者と共に活動する場など全国に広がっている労協が紹介され、賃労働に疑問を持つ人や就職氷河期世代の立ち上げも一定数あるのではと述べられました。松本教授自身も労協を立ち上げ、研究のため多数の労協を訪れて感じているのは、全員が平等に活動することの良さと難しさの両方とのこと。それを解決する考え方として、シェアド



リーダーシップ論とソース原理が紹介されました。何かを始めたいと思った人がリーダーとなり、メンバーがフォローする。アイデアを実現するために行動を起こし、周囲を巻き込みながらすすめていくソースパーソンに誰もがなれる。こうした考え方は、若い世代ほど共感するそうです。

次に行われたパネルディスカッションでは、4人のパネラーが柔軟な発想で仲間と共に働く様子を紹介。私たちワーカーズにとっては当たり前になっている「みんなで考えて納得がいくまで話し合う～腑に落ちる働き方～」が新鮮で魅力的に感じていると口々に語られていました。20～40代にとって起業=会社ではなく、労協が選択肢の一つになっています。自分らしく働く形として、今後さらに労働者協同組合が広がっていくと感じました。

【報告 / 敦賀】

地域の悩みを食で解決！！ つながることから始めよう

第2分科会 (2日目)

第2分科会では、食の事業所が地域とつながり、価値を生み出している事例を掘り起こし、必要とされている地域事業を再確認しました。埼玉からはワーカーズ連合会協力のもと地域の食を支える物流の事業、神奈川からは地域の要望に沿った様々な世代の食を支える事業、東京からは商工会とつながり、パンを通して子ども支援や学生とコラボした事業、千葉からは子ども食堂の運営課題から、休眠預金助成を受けキッチンカーの導入や生活クラブと連携し、寄付食材の循環活用システムを構築するなど人・モノ・カネの地域資源循環を図った事業。北海道からはカフェの営業中はいつでも子どもたちが無料で食事ができるしくみ「フードリボン」の活用で地域とつながる、ぼんこたんの実践報告を行いました。【報告 / 泉】



ほっと館の1階にあるコミュニティレストラン「ほっとマンマ」

オプションルツアー (江戸川コース)

見学先：(N) 江戸川たすけあいワーカーズもも / (N) ほっとコミュニティえどがわ



まちカフェひろば「もも」で事業紹介と昼食

ほっとコミュニティえどがわが運営する「ほっと館」には、1階にコミュニティレストランと訪問介護事業所、2～3階には高齢者の住まいがあります。入居者が自分らしさを大切にしている姿に触れ、居場所づくりなどの地域で支え合う仕組みの大切さを実感しました。

【報告 / 高田】